

イベントで使用する台本の冒頭部分をまとめました。

参加する際の参考にしてみてください！

ここに載せた台本以外も使用場合があります。

WS用『箱』抜粋

【登場人物】

スズ子 (31)……………居酒屋バイト／元パン屋バイト

ミドリ (31)……………パン屋店員／美大出身

ユー……………ソルヴィフォン星人／飛行船教習所教官

タロ……………ソルヴィフォン星人／少年／一個目の塊の方

【設定】

小規模SFコメディー！

ある日、スズ子は空から落ちてきた謎の物体を発見し、それが宇宙からの飛来物であると信じ家に持ち帰った。後日、友人のミドリに自慢して見せていると、突如としてその物体が奇妙な音を発し始める。その時、二人の体に宇宙人の魂が入り込んだ。その宇宙人は飛行船教習所の教官とその教習生のような。教習生がパニックを起こして船は墜落してしまったらしい。この宇宙人は元々の体では地球の空気に耐えることができない。宇宙船を修理して故郷に帰るためにはスズ子とミドリの体を借りて作業をするしかない。教官であるユーは、とりあえずミドリを説得することにした。

○アパートの一室・スズ子の部屋

中央のテーブルの上に金属でできた箱のようなもの
(脱出ポッド) が二つ置いてある。

ユー(スズ子) とミドリがその前に立ち対面している。
ミドリは険しい表情をしている。

ミドリ「私、あのー、普段パン屋で働いてるんですけど」

ユー(スズ子) 「ああ、はい」

ミドリ「ちよっと、できれば仕事続けたいんですね。あのー、

好きなんですよね、パン屋の仕事が」

ユー(スズ子) 「ああ、」

ミドリ「半年休んじゃうと、復帰できないかもしれないし、パン屋って結構ハードなので、そのー、働いた後に体お貸し

するとかってなるのもちよっと厳しいような気がして、

……」

ユー(スズ子) 「んー」

ミドリ「できれば、その……、引き受けたくないというか……」

ユー(スズ子) 「ああ……」

ミドリ「もし……可能なら……」

ユー(スズ子) 「ああ……」

ミドリ「すいません……」

ユー(スズ子) 「……………あのー、修理は、メインで私がやるこ

とになるんですね。タロくん、あ、ミドリさんに体借り

てた子ですけど、」

ミドリ「タロくん？」

ユー(スズ子) 「はい。タロくんはお手伝い程度にしてくれたら、

って感じなんですよ」

ミドリ「あー、そうなんですか」

ユー(スズ子) 「はい。なので、スズ子さんがもしフルタイムで

体を貸していただけるようだったら、ミドリさんは週に

数時間、お休みの時とか、都合のいい時だけで大丈夫な

ようにしますから」

ミドリ「……なるほど」

WS用『傘をさす男』抜粋



【登場人物】

大島五郎……傘をさす男／ネジ工場勤務／詩を書いている

小松ヨシオ……五郎の同僚

【設定】

五郎は普段から傘をさして生活している。
元同僚であり元恋人と再会して、現状について説教されたりなどして精神のバランスを崩し気味である。
ある日、五郎は仕事に遅刻してやって来た。

○休憩室

ヨシオが椅子に座り休憩している。

ヨシオ 「(携帯画面をふと見て) あれ、あ、メールきてたわ。
ん……? 『やっぱうちの釘は日本一。いや、世界一。村
井ネジを誇りに思う。五郎』……。どういうこと……?」
その時、五郎が色付き傘をさして右足を引き摺りな
がら入ってくる。

太ももに釘が刺さっている。

ヨシオ 「あ、五郎ちゃん、遅いよ」

五郎 「ごめん」

ヨシオ 「(刺さっている釘に気がついて) え、おいおいおいおい。
ちよっと待って。何? なんで釘刺さってるの?」

五郎 「ちよっと、死のうと思ってるね」

ヨシオ 「は?」

五郎 「あのー、うちで作ってる釘をさ、トンカチでね、打って
みたんだよね」

ヨシオ 「は?」

五郎 「うん、そうそう。やっぱ最後はさ、12年間俺が作り続
けたこの村井ネジの商品で幕を閉じたいなと思ってね。
ネジだとさ、エグいから、やっぱここは釘が最適になっ
て。うんそうそう」

ヨシオ 「それで、打ったの?」

五郎 「うん」

ヨシオ 「何してんだよ……」

五郎 「やっぱ痛かった」

ヨシオ 「そりやそうだろ。ていうか足に打っただけじゃ死ねない
だろ」

五郎 「そうだね。だから、段階を踏んだわけ。やっぱ段階を踏
むってのが大事だから。段階を踏まずにいきなり高度な
ことしちゃうと、後が大変だから」

ヨシオ 「……」

五郎 「で、この足に打ったのが第一段階ね。これ、第一段階」
ヨシオ 「……」

【登場人物】

ゆう子

【設定】

ゆう子は、友人と新宿で飲んだ後、終電の中央線に乗って、自宅のある国分寺に向かっていた。なんとなく気分が落ち込んでいる様子である。

途中、大学時代の先輩ミツイと遭遇し会話をした。先輩は夢の仕事に就き、充実した生活を送っているようだった。先輩は吉祥寺で降りて行った。電車は国分寺に着いたが何故か動けずに電車を降りることができなかった。終点である高尾まで来てしまった。

○電車内／高尾の町

アナウンス「まもなく終点、高尾です」

ゆう子立ち上がり、電車を降りる。

ゆう子「（キョロキョロと周りを見回し）どこへ、向かおう……」

と、横から男に声をかけられ、パツと振り向く。

ゆう子「（「なにしてんの？」）え？（ゆう子、イヤホンを外す。

「ひとり？」）え、はい……。」「（「なにしてんの？」）

いや、別になにも……（「終電なくなっちゃった？」）

ああ、そうですね、終電のがして……。」「（「あ、飲み行

かない？」）え？いや、大丈夫です。（「行くところない

んでしょ、飲み行こうよ）」いやいや、（「あ、じゃ、

ホテル泊まりなよ）」え？（「近くにあるんだよ」ホテル

の方向を指さす。ゆう子もそっちの方をちらつと見る）

ああ、そうですか、ホテル……（「ちようどさ、帰り道だ

から、送ってくよ）」いやいや、大丈夫です。歩いて帰

れるんで。（「え、電車ないんでしょ？」）いや、歩い

ても帰れるんですよ。だから大丈夫ですのよ。（男、ゆ

う子の腕をガツと掴む。ゆうこ、ヒツと驚く。）え？な

んですか？え？ちよ、え？（「ホテル行こうよ）」え？

なんですか？行かないです、行かないです。ちよ、離し

てください。…何なんですか、あなた。あー……！

（威嚇）」

男の手を振り払い逃げ出す。

逃げ切り、息を整える。

ゆう子「……なんなんだよ……。ふざけんなよ……」

息が整うと、公園に入っていく、ベンチに座る。

はーっとため息をついて、いきなり笑い出す。笑い終わると真顔になる。

ゆう子「……くだらない人生だ……」

すると、猫が傍に歩いてくる。なでる。

ゆう子「何してるんだ、こんなところで。寒くないのか？……お前は幸せか？……どうすればいいかな？これから。馬鹿だよ、ね、こんなとこまで来てウジウジしてるなんてさ。ホント馬鹿だよ。なんか言ってくれよ。おお、そうかそうか。ありがとね。励ましてくれるんだ。私も猫になりたいよ。そしたら楽なのにな……。ん？ああ、ごめん。楽じゃないか。そうだな、お前も大変なんだよな。ごめんごめん。（聞）全部さ、消したいよ。今まで起こったこと、私の人生に、起こったこと。それでさ、もう一回生まれ直したいな。そしたら、もつと頑張つて、まともな人間になれるようにするんだ。それで親を安心させるんだ……。（聞）まともな人間ってなんだよ……。（急に立ち上がって伸びをする）あーくだらねーな……。はー」

ラジオ体操をする。

体操が終わる、ぼーっと空を眺める。

空がうつすら明るくなってくる。（照明変化）

ゆう子「もうすぐ朝だよ」

猫が去っていく。

ゆう子「じゃあね。元気だね」

ゆう子、立ち上がる。

ゆう子「帰るか」

公園を出て歩道を歩く。